源氏綱目

○しなの巻うち

うつと源氏二の三月より五月の十月

までの事

一しなの巻うつ文永元年八月ニ成ル

乃事の射所ちう宴乃みふ事ハ文ちう面白

ことやうで及事の事十二月ニ

一六条天王院の しとち前斎宮入内 繪合

りすちうさる権大納言の しとちまいり給 とこせ

中宮よりうつ

一 権大納言内大臣ニなりうつ大臣の事 まいりそ井右大

音ふぐ〳〵拾奉し後次に又音と云名石石とみりん鈴
合と又内人にいさつ石
一源氏十月より表白の源氏乃而て惟光ぐしち
と称呼はくらい形ふし以音のぐさて井石より仕
まて表のまれとしかし方ようけ治
一惟光ふしとあ表すぐさて云仕よまいうと光里所ふ
所ると音あ表が井に表れとんせと以う又の法度
つよりしがふまぐさて以ふ所ぐ又をやはてまと
わうまく以ふまう使しせ又をう姉と三人まて
ゆうと又惟光に井て井の役一たうと表う里多

音の又と以ぐ又をよけひのふくまらびたな
一二月ち東蔵院(行幸あり源氏同伴ち次の幸
とあうぐ赤地と源氏さの表い同ぐ四ふ院まて三世
十人ゆ七新宅まて故殿の位又あう次よ糸行のあこぎ
いくら春宮明と称次四弟まて大四殿あうて奉けて
て大后(行幸わう
一又音進士ふうう及市三人のうち述
一六条院とつくう本ひ又式り石条の五十賀と言と乃
し作ふ六条院まて世ちんと以ひ位ふ八月小
出家とひぐんハ世ふて吉日ふしが車十女て源氏堂

いたつくの町ハ永らく里ヲ雲井ハうしこての町へうつりぬ、
一九月ハ菅乃ミてこに紅葉を入て明ゟ橋人ニ女ちゝいふを
たを書之坤町秋好中宮より奉まり
一四足ニ十月ニ大井里より六条院のいぬゐの町へうつ
きれ
十七歌ニ見へたる詞并ニ方
れんぞじの日
かまくらの三百余之文陰服にもみどりぬ
こゝろばいるゝ
あさぢにて　○こゝろさし親にかうこゝろを
まろうばしさ
ゆくへかなき
ふしやうかなきこんなきこと

たゝきぬのみ
○さしあたりて　尚在之
やまとだましい
我国のたましい之
うつしこゝろ
○ぶしき　在成之
文つくる
詩文之　○あげなさなど　おさなき折
歌よみし
訓之孫康ハ宮を折とれ
なやの言わけゆく
墨の字之子ハ以牙に書画のつくに紙く
親ハおくりゆく
○人よそれ　猶さうなす
くさおひゐるよ
こゝのかうぬ手結之
ちりぎえす
比邑の系をたのまてくゝ之
よいとびい
立あつぶん　○あてに　あてやか之

姿のさかりで
こういのなつき
くさあつせ
つもりのたてべどやさそ
水のちりすてる
ためたくらあまる
萩にさかまる
子どもたちは
たつもりど
みとまり

下場之
たのしみて琴の緒とあつるまと
○ころつい
ねうとたてべさと云
律の詞之
○あるかたに いだらさん
まさすぐるかと云
縁まれの文言の詞之
たとへは樽字並の文字立花内文字
後言 尚書
○たつのさん 六のさん
○かりしと おまやしま

上海也
かづしけるきあると
わてふもくにまする
たしら
わざやぎ
まかなど
んつらだ
からし
ふちげする
ねげかさらと

あくしたいけ中と云
縁まや
男くさきは扇わるまの
わざやく
山乃たい間かにせられ
ん別ねき
中き
わろさん
おきなき種之
○あさいに さいくさまげるき
○わくつけき よるねん
○ゆりりいつび
○こいくけくさけくしまく
○じゃうさす 旅ならすく

うたうたて　　変生やの言を落とつてふなあり
ちうちうど　　後言こ
なくや　　○まぐすぐこ　まこと
しのあぐるを　　いつぐこふぐらふ
うてしう　　幼かとおしーふこ
まづぐら　　○ひとぐら　ふとする
ルのをれ行まとふし　　風生　行歌言ら所
うを海ことひてるを　　○おとるびうく
ふゆるひをび　　ふゆるせぐこ　○しつうて　横嶋あきう
あくるん　　かうふ　湯ぬん

こうてうけど　　わてうふるしぬこ　○ふてうく　ふくてこ
きぐや　　すくやこ　　わけぐれの　四重
ひさうく　　わうるくしうるこ
ふうぐ
わたしまたこよとう姫　　天照大神　和歌
うてしき　　○おこうげ　おそうたこ
のこうすふうを　　年ちうを　　○こぐるをこうく
こうゆふがうのくぐて　こうゆふ　ふうとうをルを姫のくこびく式
　　毎こてうるのふ　　○けしうてを　まこく
おひうををこく　　幼くい未こ　こうを

あとなる稚ごころなるを　吉兵衛と麹屋祝ともいふ

稚ごころにおもひてはらはあり

いつ迄　幸の一日ばかり京祝をしてゐる

つゆくさのあにのう　放逸の紙文

とべうく　おちつくんこうふくん

日ぐらし　言うくんこうくん　○あぐやうに　吉兵衛うの

花のあるやあせうう　花のあせうこつくがうう　つくき位

あるふと　所名うと　手紙をるふこ

こぐふくはうう　老ひがうこ

四年みのう　賀のいとい　吉兵衛と申

こうう花　○ふれて　初こ湯紙てこ

野山を酒よけをふれる秋　○こうあがきこうがきてこ

△小松中に友しいるかいるよいう　友しびうつとこいこ井戸もこ紙のう花久三郎

うこうこ又第三世て出ることんて　久三郎小僧をうて言うこうこ

△わたくしよりの船の三人　ごよわう船に紙吉乃井こ変式の祝名紙を紙吉

の三郎こ三こわう惟光　惟光ひとこ文彩市ちふきいくよ

久三郎こ人に惟光ひとこ　久三郎こ人に惟光ひとこ　我ら所ず

ふとたづねてとこたへて秋の所ゝ
ほ遠ゝせうう標花ずる二年ことよとう所とめう天
歴古神こゝ天長年ハ天し女ゝう始ゝ 寿花

△言のさえつるゝ色いろ言ゝてしつまりて花ゝ
二三のゐハ玉雪鶏こいまもじゝのえづゝと同のこ
花ゝしつまりとハ相つゝの市ゝしつれこゝ
ていこゝ

こゝのとゝこゝてゝつるすまゝいもゝまゝつげつる言の如 未詳

まゝこゝとハ仙洞こゝとつげゝつるこゝ言鶏の色花
衆のみゝと行幸ゆゝこゝと始てゝつるこゝ仙洞とゝて

がうゝこゝゝ

一云

中秋の四まちとハ月のこゝ色こゝこゝ色
ゝいづこゝのゝとくすゝ月ゝとこゝ
岩とそこゝたこゝ秋の月とゝゝたつゝ
その花ゝあひてゝゝゝ月ゝ
ふゝまこゝの色こゝて いづこのゝこゝ
やゝ水の月ゝ岩とたてゝのとゝあゝ たこゝ
秋月四夜ゝいつゝしこゝの夜の秋

○ 五つ巻十七

六月より巻名ゝし源氏三十六の三月より十二月までの事

一 筑前守左京少貳任じて肥前へ乃
ぐらふんとゝ内々病死をなげきあ
ものつゝと京へわたのぶと法かの春義のうへ二
一 肥後國より変陸して藤原ひろくにあつまの家
つゝとゝんとゝに少貳小弓帰ちゝとゝ
郎とゝつゝひてゝひゝつゝづゝ
三月八季乃ゝとゝゝひのべ
ゝて吹ゝ左郎乃ゝ後母ハ

夫婦乃中となりきて玉かつらの作てあまた二月の中に
のかり少弐の小舟乃おもひたちとものゝかゝしとしまへの叙
九条なる旅に宿りし
一 三月よりのかつら秋まつり乞八幡へ参中まうでのぶ
しかれなまいかる肥前の松浦の宮箱崎の神も八
幡と一所なりとて次に九月に初瀬へうちまうて椿市
まて宿にたりし夕顔の君女君をとゝ今まいり
あかせて玉かつら三日まうてはわかきちかきを逢まいる
して君の夕顔よりのみの源氏やちかきまてかたりてまいら
玉かつらも同し宿よりあはせて六条乃所をたづぬる

宿とさて含ての所なる六条院へ参りて宿に
玉かつらの宿九条よりいひのたよりにまゐる六条の
又の日源氏へ玉かつらの事を告ましに
一 玉かつらの身の上の事すて万事とも同し位をも
玉鬘は若もち源氏より玉かつらの宿へわたしの御装束
を送りなされける
一 六条院へうつしの所なるかの夏の町のうへのさまを
て玉かつらの東面の西南の部屋にすまひに
へうつりて年廿一二七八の源氏の対面に歎のかゝる夜
ききのこととてかひとのかゝりけりへさせまつりて廿弐乃

婦子な嫁舟も出るゝての家目る人形よらすゝ
一年のくれは深武のもひ人さらまおゝの炭ふきあて
着ぐゞるあり出るつてへゆく無よりんて代のおとゞ乃
花やうにおかささけとんさて乃まうりしるりぬふ
附くりぬし内大臣乃婚や約出まうくをしふら陰
るうり
一こぬくゞりに来つひしもりうりう言寿乃深武の世言あり
古統(こたい)の言の批判(ひはん)あり
一もし言うよ目つきに狗并言
あう人

○うひまうら　当ひやうなる人

ねどつきと　ねづくこと　○ゆがなかもすかとくらうら
どのがおゝ　どのもしごうしこ
ふふる　○くる腹もらやすしく
ひふのゆうれし　何いふは東海之南海の名雛(ひな)とぞて成長(せいちやう)す
なきくつとく行く旅(たび)よりたびよりかよひ衆生ぬ名ひ家の
別とふ
おかたい　往綵(ゆき)しきこ　○こうてついく　竹綿(つと)てこ
すきまろ　好もこ　○ひくつけく　おりつきこ
こ紫だこう　逍(ぜうよう)　川ふるは古びててふ
衣よくれはけまう人　乱紫人　俳相人ともま

すぐるとに　　五細あるべくと
くぐるの秋　　松浦まゐる秋切金屋の浅化(あさけ)て在る
あきにもわると　　我にもあるとこ○ぐけくし　去ひぐと
とふるこのしすと　　○ひとこのあと
ひくごまるもの門屋を　　庭泊は海家門屋横はる
ゆるのくぐにすぐる　　ゆるぐるとたとと
ふたるさと　　○たのもしく
やとと　　ろ　ゆるくるとと○せこるも　海ふとぐと
ふ秋ろ　　樫秋落紅のとろと
あるれさる　　あるとき別とと○雪石ひとと

こはぐる
ふぶる
おひまる
ふどの
このうし
つやうふうひ秋ろ　色つやうひしこ落紅のとろと
△雲にりゆさぐて　松浦(はるのうら)ゆ山ぐこの秋とけてちうん　重陽
雲とふ雲ろの雲とすやんぐぐこと秋と
ふたこと松浦和歌の秋とけてちうんと
きとていのなのたひふゆうんの秋とうしこやうん　廿六日

年ろの立ろわやぐとふ　花ゆてまはまろ
心秋　　○三月ゆるまろこ後の秋
親ろるの生ますろと
文庫こ文庫こ
○ものこつぐこすぐ流(ながれ)つぐけて丞(ろう)

年月絶てさ幸にわしんとこひ一度豆腐にむかう
とろれ給ふ外とつひとあつこの少ちと豆腐と
をたてーとしとろさ方のほと付うていくを
うう多ふ片物あっを豆腐にちらふ幸うをう
ずぶすわっぶ外とつうんとふとこひまて
豆ういうんやこうう

△ちうとた紛てちんみ見おうみうれたちたと浸
ちんみとつけうみうふ多豆こ多こいこんね
やタ点よの多こおうふ入ふり浸んだ浸食のい
うううこ田おやのうちうこ

一五

ちゆみこいてうほこにうんうほうれふこうろ
北さこうこてあやううまでこうとのうねひぎうろ
うぐうぐうぐうにうこねういぐのみうやあんちいうなみ
のうぶやっにてうろいふりのあう
ちゆみのやうこの西こ女どものう　こものうこにうぐうこ
すうろねこうやうふのうこいふふ多ちうの
教うねみにせてこの茶こ根もて多あうこ浸のお
やなのんうせてこ根をこちふ籠塗こ浸ぐこてあう
しまうこ

是又俳の冥土
の月と云ふべし

○初春　豊亜三

うたゝ寝の巻名ゝ源氏ホ六の初春の事

一元日に紫姫君のまゐて歯がためとうの祝して侍とう

ちゝし居ゝと源氏のぞき給

一日蓍ごとに源氏門ゝぐいに系賀ゝ出ふゝゝ

と言ゝゝゝゝゝゝ姫君のまゐりまゐい元日子日と

ゝし庵のこゝ乃小松引あつぶ小のおなじの四ゝ

ひげ籤ゝゝゝごゝと姫君ゝゝゝに御菓子等と花

枝ふゝて言ゝあゝ世ゝて言ゝ姫君ふづゝしのゝゝ源

氏の祝ゝるゝゝゝゝゝゝゝ

源氏ゆき本丁ゝ一のけ御殿して西の対乃おりゝゝ

移ゝ御殿ゝゝ蓍ゝゝ乃ゝ乃ゝ女君ゝゝ

ゝ人まゐりゝゝ祝のゝゝゝ双陸ゝゝ

ねゝゝに琴のゝゝゝゝゝけゝ御殿ゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝ

一二条院の東乃院ゝ右ゝゝ東つゝ紫ゝゝゝゝゝ

御ゝゝゝゝゝ元服の尼ゝ宿ゝゝゝゝゝゝゝ

一正月十四日男踏歌あり内朱雀院西后にして家院
一条院ハ此ほどいまだゆるしなきの對屋に局
ねんまわりつゝふ、あるじの来て明石姫君の對屋
より見まで一所にするハ梅もてやうやく曉月の明
つゝ松風吹きて寄て竹河少将の夢中にとゞまる
一踏歌乃としくの後宮にてゆるしなく
つゞきて此のきんへよそほひともしかりしき
給ふ、
一 豊明小見て羽 并云
木のまもありけり
○庭よりくじまん宋昇み

いけれものにた 梅の云 ○かゞみ 竹河あらし
さかえをいまでよろこぶことをよせ
とふつき 壽羽 日本紀 ○池のかゞみ 薗風
下つく ○小のおと
ふくしき 云のまつりぬとも
えびつる 常のなつまて日本紀の伊井梅枝の鬘
此卯花成蒲萄
ものうさん ○つみるく 踏み
くゝの年れたのてさまへたのむな 夜ハ暮すき
たとへハありくとこ

うゑのもの

やまとし

わらはやまひ

ぞくぐくと

食ぶるねし

こすりとて

ひわらび

ゆびをくひ

花のうらふ夕ひ

わきいさ花

姫がくさ花とふ淵

○柳花苑巻之五部類

○うゑ草

○ゆもぎし　ゆもぎ

○ゆびを　手すさび

○ゆびをくひ　ゆびを

○花のうらふ夕ひ　ゆびをくひ

○わきいさ花　たなうら花

姫がくさ花とふ淵　あけぶの

花のもとべぐく

はるらそで

うぐひすの来つるく

うちきらい初り

みの代ぐく

をしくもくらん

近衛の公

ふるいわもる

うぐひすや

若曲り有て所の洞るとも

懸るふるうぐひすのこゑ

初音　定家

梅係ふ為紅のうちこゑ

○うぐひす　ものしこと

蓑の代ぐくとうぐひす

をしい惜こたゆこと

○ひとこと　やまぶき

○ひとよく　柳置く

男踏三方ふ

ふい侍へうるる沼或湯陵河

七夕之収穫ハ笠鉾之事かきたる也

かぶりのもと　瑞雲の人以錦花を作て冠の頭に

さしたるを巾子と云ふ

かうこじのよそほひかなさハ

ともしたる冠之白き錦をもて包とる　巾子の冠とハ巾子

△うちわたりこけなる池のかゞみよハせたえいるきけだかく　清武

柳眉龍腰池水鏡　文集

けぬいでしは清浅氷のかげを

なりゆく池のかゞみよりも経つきけるくみては

六条院の新居大きなる面白き也

△年月を松にひかれてふる人に今日鶯のはつねきかせよ

今日はむつきのはつねの子の日にあたりてよめる也

鶯を明石姫君に比して

ひかれつるハまだ下鶯のまつはつ松の緑を見あや

根よき也とるうたり

一　元日之
ふしみ日えりけふまちせの事をうけていくとんまよと

このうた日ころひかえの脇をかまとこのまこハわくときを

づくるくたまへ心の小松川あるふ　小野のたとぐ

よりワざとが御すくえわつかるひげくとも　ワりごたど

姫君の
たまのうてなのあたりの校のうつくしき童
ども
ゐあんうして母屋のまへ
のうつくしき方あり源氏四位の
四のうへ
姫君
ゆくすゑ
たのもしうてこれすぐれたりまうるひとせ
うて姫君のをとなあるを
聞姫君九歳ばかりなる
母
うへ
ひげこわうこと
もうつくしうの事
源氏八歳にて
ひをうつせ
源氏四歳
この山にあるぶ

○胡蝶　[illegible]之二

哥と詞を巻名とし源氏卅六の三月より冬迄の事

一 三月(やよひ)の末つかた春の御前乃桜の花ざかり舟の楽(がく)し給ふ 秋好中宮(あきこのむちうぐう)も里に在す 中宮の女房を紫上の池にうかべて小山を隔てし龍頭舟にてこぎ出る や御所楼など装束ありて殿上人女房なものりあふ 夜に入て庭にかゞり火して階下(かいか)の苔(こけ)の上に楽人(がくにん)ども上達部(かんだちめ)親王たち笛吹あそびに殿の男どもゝとまりて夜あけて人々玉かつらに心かけ給ふ兵部卿宮とて源氏の弟にて玉かつらへ心かけの人は源氏の子あまたありつるとして柏木(かしはぎ)おちびさとひゝ中宮の御読経(みどきやう)に紫上よりの午刻(むまのこく)に秋好中宮乃方へ童を花としてわらは二条院にてやまとゐ備て

一 中宮の季の御読経とて大般若とて紫上より花を蝶とに装束して人と鳥とにて供花をもちて世楽人とるへ渡りて池より中宮の方へつけ給へていふ 中宮へてふと蝶鳥の舞ふ宮より禄あり

一 玉かつらへ人々より懸想文(けさうぶみ)を源氏へ見給ふ

添はく玉のうつゝ子守まくらかな
一 玉のうつゝは添寝をいふ 添ひ寝すかれ
またこ人をのへは切するやうにもうしけれはつまてつ文
ほかるゝき
一 まくらに見つけ羽 并分
星のたまく
うつゝき
かくぞ
ゆかしたせ
えくね遊まき

庭の月
雅楽寮
庭子の中にふ出るて
庭つきさゝく

○かのまやまず かねや古庭
京とつかさつかく
○つり夜
竟まうし 寄紀

中鴨の入口
鷺は波のあやし
まのえくへはまうり
ここちうかき
そのみぐれて
さしとゝきい
さうかる
あて
姑まあ見つて
おやぐり

庵の軒 ○らうなるま風の夜
時の又は鷺なとくくし
○立あくれ 立別
手まくらへ越しまゆるさや
そゝ碑とうたて
行平にかひ ○らに 細云 うれしゝよれる軒
うしわひあるく
囲 麻衣のやうに 和云 胡麻にて擣きくたあた
細云 情とあれ ○おかろけよ 螢鬼
秋つきて ○うじめいてみ 鬼らいてみ

いつれ伴しき　んてれと
かすびたり
にげなり　ふ川柳之
祢びすき
なりや
あやしげなき
ゆかりにわたりけき　ふ云
夜ことのまやれあり
りしきるて　人よ忘るゝ女祢
世月とそれ　好色の方と云ねと

○わずれずり　たりかきほ迄
○わりぬ亦し　云ふゑに迄
○そゝぬく　書てつすと
○かふわんだ　わたぬと
○うつしき人
○あごやり　栞
○こひやまあるき祢
○かことゝそるゝ心　深ぎん

とくよりや　とくしきこと
やとけりく　安りぬ之
○りてりふ　あしきにと
△しりきのゆすみとそうされハかりよあるけむしきや明月花
剛之處とさへり相よ處の花をあぶしてとわりまづ
らかんよ可りハ剛よ方を覚げてをりりぬとこ意得り
とりんゐと云ハ深長の事すハ管字
のかくは抗處と剛ますせりかりよ
河の花の處の花すれハわこれも忘りぬきのすゝき
うちあをらけつ千やくさハ花のわらと云ぶてみ　深
汁をと云てまくいまく深長のゆゆり様なぬ覚之ぶ

ものとまでみゆく
△たち花のかをりし袖ふれしほかなるもとも 語長
袖とは夕顔よみ事多きは心をこめて言ふ
ふしまつ垂穂のうたもかけはむかしの人の袖のかをする
袖のかとよれるかうにたち花のみさくてふかくきかれそれ 証歌
名取川によりてみよくもれとはせちの好色からかしわ
くさひて我と夕顔まねに浮かに我も深く
ぬ人にとなかりく（ききて）
たち花はみさくへ花さくへのかをり校也とけとまりし考證家
一宗

ねはあはゝらゝとぞくやあさ夜出でかへり小那原にとのした
つまはるかげみえしけむにありて花とも香に香し人と
こゝろぶてわるよもへさもふ門やられこねの中納言にてかへる
花れのここにふとさふへやまてたに昧まつ世ハもとしるらん
営のうらてかう禄えるのふく花にこてけされて萬
まるもれこそかくるくさふけりえるにさうよるろうる
ふかくのうをなしろし蝶ハましてそかさ夜まかた
ちて二吹のませのもにさ花ふ吊もたるおちの陰まハ出
中言のそしの御覧のえんよ 中まの乞まうへ入わり
かにてまふとるのまいわり らくとまし位くた

○雲　雲五十三

今と昔と巻々に源氏物語の文六月の雲

一　源氏の物語をかくいとゝ多事

一　源氏の今年雲をかくこゝろはかくてをづからいと変と

あるとき六月ばかりやみのつゝみ見書

とゝのゝ雲をかくこゝろにおりまし山ぶかき雲間

間まもなくつゝとゝいつさとつゝいく源氏物語の雲と西

京のつゝさとこゝろをつけて五十ひとくさ中くけてこゝろ

をよせておもつゝをかくこゝろつゝんとの源氏

おもひぐさ雲乃光りのゝ扇をかくしの

だかいとたらしげるゝと帳の帷乃ひまより君之
つのぐさまつ取之乃ぐさ文之乃也分き
と女ハ引入まつ取ふゝ之乃ふ之乃ぐさ
つゝ乃文わつゝ乃ぐさ事わつ

一月百日ハ二條のたゝ[illegible]源氏とゝ[illegible]之花
ちゝ里のゝやうゝ之町之乃つゝの西射[illegible]ゝ
へゝ之ぐに源氏とゝ[illegible]ゝ之ハ花
ゝ乃ゝ一ゝ乃ゝと以ゝ乃ゝとゝ乃ゝのゝとゝて源氏ハ伝ふ
ゝ乃ゝ乃ゝ也ゝ乃わつ

一ゝとゝ乃ゝと之ゝ乃ゝ乃ゝ里ゝ乃ゝゝ乃ゝゝ乃ゝゝ乃ゝ

ゝ之月百日之文ゝ乃ゝ乃ゝ源氏ゝ乃ゝ乃ゝ之ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝハ乃ゝ乃ゝとゝ乃ゝ也ゝ

一源氏乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ里ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ハ楽才移村乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
乃ゝ乃ゝハ乃ゝ乃ゝ之ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ之ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
とゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
乃ゝ乃ゝ里ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
の射乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ之ゝ源氏ゝ之ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

[illegible]

一[illegible]

[illegible]

一[illegible]

[illegible]

一[illegible]

[illegible]

一[illegible]

[illegible]

一[illegible]

[illegible]

一[illegible]

[illegible]

わるまれとて四一條
ふなこうてます　　ナらふしてうやうるんと
わらうる人（後和ニやうこうたる色）にこやうるん　　○けこやう
みぐるとらあ　　○さうじこ　えんこ
あいる
ふるこうど　　かのうたる　かのうる事
ムるこうこうこのうしうこ　　○ちやうし
ヒうび　　○うびやう　人の樂のうる事
うやうら　　女訳うこうこ　　○世ぐうるやうん
ぶいうやう　　○いけみうこうこ　ものあげつこ

つやまこうぶうぐうう　　○うつてもうこうこう
こうねのうりひ　　○いぐこぶうるまてるー
ちつぐび
まうぐう
うこ
あつうりこ
こうふうこぐび
こうつうふー
こうるぐこ
ムうこうこ

あひてこうこ　　○こうつけて　こうつけて
実うる神と作う
ゆこ　　○こうつけて　こうつけて
人ひあつうりこ
りの所の格神ものぶこ
ヲうこぐぶうこてある神
河ゆこ　　○うこうこ四
○いまうこ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

△ちはやぶる宮のもりにはうゑのうゑ（宮廻）
君をもとめ人の花をぞ折る
（立ち帰り）
（立ち帰り）人をとはぬ世の人をとはぬ者とき
こいけつまでこうて
（我り）
琴をとゞめ人のこゝろに管をいるゝ
人の河ふかしてもるぐ管ふこと
ハ管乃ゝ
△ゐのこゝろをきるゝ
ゐの船ハ神ふ（ふら）ゝ手（とゞ）ゝ
ゐ（ゐ）ゝ
（花園）
（花園）
（花園）

つけてもとい入れのぶ（ほそかの）ぐるまいふすてう（まうと）ぢやのき
いるる四年下のもとにてこ（おう）ふ（まう）ぎ（元年の）もそこ出て
つ（ほの）ぞ（ほ）ふ（ほ）ぞ（ほ）ぞ（ほ）ぞ

○常夏　豆蔓と西

[illegible]

[illegible]

一二月暑日東の物語として深草[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一西行とまうすと源氏と平氏と
既に相分るの人乃志のふかきことと
いうて又人言と平家と西大臣のさけまふうこと源氏の
まうで見大乃基と大とさうさう也源氏和琴とさうし
律ふくべられうるといとおかしの事
うて人々の世のことをうれとのまうけるとの
とうて

一西大臣はまことに高のまう源氏のむうつのまう平
家のうつるまう抱沢のもひて次と平家のうつる
見ひうのでいうう力強く大臣殿とまうして国と
西をもかもうのことへまうの仏徴愛の御所の地
一西大臣とまうさるうはうとのまいに徴愛の御所より地
つうれまうとうて女御より西大臣のつのそふ
手紙のうつ小弟とのぐさまへ力乃乃と双六とうち
をとまと小さいくと古とのどうとふくとの点わがまにあ
くどとあくふべてまうこと法とまうわとの事西大臣
西入て手紙とまうて抱沢一女四(四名)あうて万人の
まうそ内侍ふ次と双まの地とまうと源氏と浮舟と
一手紙とまうと女御まいう四月ふうらんとて文とまうる
也事わう

一昨年に過ぎし頃氷室（ひむろ）の
縄（なわ）いかにひやしうる水を　河内国日本紀略文
こゝろとゝめ汲みひして用ゐしてうれの例を
内うどき　ひしうきいるゝ事
せゝのうるゝときいとくうるゝ　すゞしげよ竹ゆ　あつさにうるゝ
ゝれて上（いと）流（ながれ）うけ乃あつうりさが　ゝ涼が風
清か紙に松双紙を流ゝ
あつき日いわりびるゝすきまゝ　ゆふあるゝ
おさふびるゝ　延喜二十六年の上ゝ新ゝ
ゝるゝ

加（かう）こまゝと　礼紙をそゝ
かゝるのびゝ　そゝ紙を外風（げふう）抜ゝ
まゝ　いつゝくてまゝとすゝまゝ
ゝれるゝ加ゝら出べきゝあゝ　あゝのゝゝ田れいゝ
ゝ流ゝと問ゝ天ゝ玉ゝ事ゝ地ゝ　ゝの比ゝ美ゝんゝい
てあゝゝゝ人ゝてあゝゝ　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ出
ゝゝてゝまあゝ
ふれゝい　ゝいゝ外ゝゝ　舟（ふね）ゝ流ゝ
世ゝゝゝ人ゝ
ゝつけゝ　あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ歌

乃宮ひとぐらんと変ふるとなりてかーぐるまく
ふるのとくくるのさとと云
○ものとくくるのさとと云
西のこうひ
○ものとくるもと
ものーぐーぐ　光井のう
○人とろさらとのこと
おらぐ家をたいろく　おらぐとふ家流後の姫ろうと
いろく
○うとべ
いまあろ中　人の中ワろうさと云
○こいあく　拾ろと
こーたなたてわびさと
○ものーわさけぐろけぐやたとも
ものーとも手ろもけら
ろひろるも
○ミンで　あの

ゆつけゆくはいて涼ゆ　メ付と
ちとくーーきい　歩くと　○世にすぐ　語ると
家のうろかぐい　祝のうとあろうと
ぐくくーきと文集　細碑と手ろのうのぐくくーと
○人のけーとのふうとあと
と早ト（いげ）ろいて
○内ろと
ととととひろん
祖きぐと　祖宮云
○ぐーこの淡社たろメぐく
ぐーこれのとこの　ろかろ
ひる　やきのませいとのうくけ
ひる
ぐどもやとーかてろ羽　ろうし　磨（まき）

○神がそーとと
おるさどちのひとびとけんのうけど
ちゝどのかて
秋の夜の月新源しさかぐ奥ふかくいあて虫の声ふかき
りあるせゝるかどけちうくいまあり　紀の国の和琴
ふとくた　　天正
○ひぐきのぞう　和琴のう
かさいてせてなたまふ
和琴のまま
そぐき　　菅猪と和琴　和琴ゐかどる　たの
そぐちふてかくとそぐ　　嘆
あふぎとるし

うつまとたるやうまとどのの男を
ひるも光書面とりたいくの思ふちどていこふと
紀のおやゝたゝたゝをわるも　えのつきに安の言
和琴とあづ伝和之紀のおやゝい和琴とそぐふ
ゝゝゝ琴とおやゝていふうづしき紀
ゆきりいとうつうてひ　貫河に俳さるのうを
ゆきりの海のやうて松やゝうたゆる和いるて
釈さるつま
○ひちゝど
みゝゝかゝど　ゝゝたとふ
おゝるて　　おそつまの砂どーて二なそつま

又角力くさもろ角力

山やまの　いやあらしさ　○ふるの夜　雪のふる

いぶきさ　山ふしなす　○ふるのうた　大くさ

ちぐさのたうろうろ　○うづさすく

ろう言　○おくだーさ

おくさぐ　○ゆくりあく　さくさ

あつうりく　暑すく　○さらさく　ふくしてさ

うつのく　いつあふくさ

まくさ　ふくつけどくさくおぶくるはし

人の祝ぎどにふくさ　祝さふ

祝ふ　ふくさ　○あつつけさ

ふくさ　義て言ふくさ　○ふくさ　古ぐやに

簑ふやくさ　○祝ふつけふ　つくふくさ

沙彌屋の女御　とんてい　文角屋乃ふく　柳の花乃

らけさ　たふあぐけ　けのやふる　ふぶくの

ふのあくつけさ　○あくふ　あやふ

ふやくふれたそぐ　つせなる

ふいくふ　○りぐまられ　野ふくらく

ふくふ　○ふくふ　法師

ひるびあや一記をくの中にあいで
○こいぐもく泊ごて
うらもつぐ　　くされはる
笑もる　　なのまく　　○ぐぐう
もて来あいね言手つけ　　○何の知らたけるん
ひつくし　　○さんるてさらん
やくし　　○うるもて　　月別こ
うくんね　　○じくつけくうて
こつけてもやくうもうう　　こつけいかうつけこ
うぐくたうろくるん　　○ものぐ

△あてしこのこうつくもとみいりのうれのとあれ
おうくと文四大たのんぐ
こくとい四大たこおうて
ぐるとぐいうこと
ぐうのうれふおしい　花のうくう花こと
ぐうい母ようよるぐ　花のいおうのすいと
我分も母とも昇下して　ちうたまと四方あれて
やくいうく文四大たこ舟四あうこれのこ
△ちのつくこいうの四乃ぐ海いうぐあいんたごのうぐ
四方ぐ後四あこ海こいうこてくふ分あ一四業

玄石元祈と云わらべ来りて言葉をかけ
ける

いちはるとなるの海ゆうて海の浦より立ちあがる
四十里の名石とも玄石元祈とも一理なる
あらたに立ちあがりて

一説

やぐそ山のふもとにうたちふたたびこれをまぶ
ちきたりてとーちうてみちちの元とてぶれなるい
うくのあうとぐろ千ぐろとふとせちふとし
もこてゆきいくとふふ名でいとちてくとこうやれとも

人のうたれるをもひろいきやしのうちにて行つまでのうちち
なるうちうちうでのあるきうついたるとんいまのふしへを
ちくに動ちこやまとのりくーやくーぐうとい祈りて
ここにる子出どくらいたちくにさすぐにわいぐやう
つきたるくうてうんうるーうつうちうげうると
みちちあるこの元ちとちぐろくうるうちうち
じのあるきうちうい又四人に四十出ちうん人ふ
四位のくあり

○ 箒火（ほうき）　豊後之文

所ゝ何とも考へ難し次源世方七月廿
一日ゆふ方西方にあたりて家ゝ
のまへにつゝのゝしりもて家ゝ
たらひ社がまにさゝやかれ
一秒にたりて文六月入ゞ
まひ和歌ゝたりとて
しまひ庭のやうに水に
なりとたを方文とあり
しゆんとまりに出射（いさ）
紙ちる里方ゝ

きすまいの中ねどころ四大臣の子達相手中納
言の舞かねなりんと源氏よりせうそこあまた
三人かあるゝ頭まてゝ六ゝの出家まて源氏
頭の風の吉秋のたゝけ第の吉とのゝ花ぞの
とて和琴りいてゝ吹ゝ源中納言を
ゝ舞かねゝ中ゝ出てゝ源氏ゝ舞ひた
ゝ源氏の和琴を相手にゝ相手に頭中納
言ゝ出ゝ人ゝ出やゝ出ゝ舞ひ新ぶ
きかうゝ出ゝとゝゝし
一日紫に見へき紅葉 年十

世の人のゝゝさ いひちゝを あゝすゝとゝ
かゝと そつけなく 源氏 旅ゝさゝつるてゝ出ゝ
和琴ゝとんゝけてもう きかわゝだ
うゝゝゝゝゝ出ゝまゝびゝゝ
かゝゝゝに出ゝ出ゝ花の姿ゝたゝ女郎花やれ
こゝ見へかゝわゝ出ゝ
ゝよ吉ゝゝまゝゝ見ゝゝ見ゝ
山ゝに出ゝ出ゝ源氏の見へゝ出ゝ
紅葉を紅葉にけちてゝかわゝ出ゝ
ゝにけちてゝ源氏の出ゝ紅葉ゝかゝ出ゝ

一百

萩の葉もやうやうわきまへるおとしよりは
桜にて（源氏こうこうし）ひろうさうしてもうしろ（みつうつの赤と源のもうてはなし）
れまへのあるを大きうさうしごとるを
ちとうちとをとりやうつけさせて源氏に
やうあうかうにうさうしにひろうしまあこと
乃本はとうれはおとうくわうぬれにとさうさ
しちぐきてうりうまいはまあうさいてもぐく
れうきおどるひうよあうはうるもうあて
ひうのあうくうまいいひやうにあてうるうちて

源氏

おうてうくおうやまうう　たえうさうはてうつは
あうあうるれおどいあうのひうくなれいはあうく
れおうくおうやうのう
まあうれはにうるやのうあいあう　れはあ
人あうう長ううちうとれはて源氏とおうう
ようは　源氏　うてうまう
あう

源氏詞

○野分　笠亭仙果

詞をゝ巻名とし源氏三十六の八月八
日の夕方流れて秋の中頃の野分
を題とせり先ゝ野分とは何ぞと
問ふに大風なり

一夕方の中ゆゝしく大風吹き荒れ
流れの所へ出て見ると草木わけて
あらしあらるとうんまへいきまきに出
まの時は家ごとまりかで樹乃吹みだるゝを
見るにちゝまわがおももうつるやうまわいぶ

八月はちがつ頃ころ附つけ源氏げんじ物語ものがたりの姫君ひめぎみ方がたにて女房にょぼうなどの
次つぎ源氏げんじ殿どのよりの御ごの姫君ひめぎみのもとより使つかひ
来きて参まいりたるを又また女房にょぼうのぞきつゝ見みる
一三条殿さんじょうどの方かたの祖母そぼ人びと相意あいいの中なかの侍従じじゅう内侍ないしの
典侍と六条院ろくじょういんにかよひ給ふ女房にょぼうつゝ
見ミハ暁車ゆえ見ミの意ことより源氏げんじ方がたの女房にょぼうまゐる
源氏げんじ殿どの中なかの侍従じじゅうの君きみと使つかひ
ぬしとして侍ふ廊ろうより女房にょぼうして来きたる中なかの
侍従じじゅうの君きみと見みまゐらせ御格子ごかうしあげ
上うへ人びとこゝろ慰なぐさみかねたる物ものゝ女房にょぼうハ三人おり

使ひの給ふ給ふ源氏げんじ殿どのより拾ひのあり
まゐらせ給ふ給ふるなどもてまゐる女房にょぼうハ中なかの
侍従じじゅうの君きみ
源氏げんじ殿どの方かたの侍ふ人びとハ
夜ひる女房にょぼうたちまゐる
一中なかの君きみ小こ侍従じじゅうの君きみ
なども夜ひるの宮みやばらとて
さぶらひ給ふ源氏げんじ殿どの侍ふ
あり給ふ中なかの君きみ源氏げんじ
まゐらせ給ふ

あやしく思ひたる屏の上帳のもとにまいりてのぞきまゐ
るうちに八月十五夜の月みまもりたるに夕霧の侍
ひとびとまたまゐりあつまりたるに方違ちがへに源氏の君
まゐりたまひぬるを祝ひなどまゐりて綿など
一源氏の君はまづ夕霧の朝あさてかへる又月なる
ほどなどをいとこまかに姫君にかたりきこえ給
離の夜やがてかへりたまへるとて紙
筆を給へりて手習ひ給ふ紙
つかひたまへるさまいとうつくしげなり
ろびたるのぞきてゐたまへる夜のこと

風にあらびたるやうにけうとくいとこ
一夕霧三条にうつりたまへるに
ときこえ給ふ達れかし四大臣
月夜に大臣はやがてまいりたまへ
と給へるにまゐりたまへる
一連歌する東の対の西面
人々ゐれかく
秋の花と庭にうゑ
花のえだをもとめ　○野辺の花ひろ　花をも秋
をもとめ家のひろ　○つゝわるる野辺の露　庭に
名をもとめ花の枝　○星合ひ

ぬぎ捨もんてぶ吹まようてはいとけてはつまは
いみーと死のとたたかうもげく　あかまきれ
風そげば岩かもいたあげつる　食きものく
石もぐいいもする風　吹あひるくもあひるく迷風
四方れ捨つまどえさらどこまもるべさ
ちらめよいひ　高乃鉢くさこのやうなる人を胡麻
みまもぶ涙ある人命もびんを命のこて
捨ちあうさいる風とこまあて所女のやうに立ちな
風乃吹ま　○山乃まを吹るびかー　二度井
乃ぬ狐ここ使わめてひやくこん

風をおぢこごて　こうぢする風くきまりてく
うまとへちかるるこの家さこくとて家ハいて捨ちこー
寄わまるん　○けちうき
ゆるひるきれ洗らひい　ひまうきあひくこたるれるく
まめやたつーーつまこ　○おてきまひう　別て変
松やうけう　寄りく○ふろくま　ふれうさ
うるされ　うるーうさまるー
ぬおるひて　寄ぬて　○きびいる
おろうくも　おろうく
おろうくもたがひてん　○ぬぐれ沢ぬ
ぬるちろわるる

○わるまこ　みやうるう
○まめだちてでこそすま
○祝ひごとだち　はなぶく
○まさぐるか
あさちむる
かめのかする　大さるる○人こまをよめさ
大さる小枝の芸ゐる風のまもらる芸人ちて
風を源氏まはるく芸たて神ふてまもとふ
まさかりといまわるを風いまだて大さる
さくとく風ひとはある時大さるの風さく
咲みる風のうさにをまはまてぬくさんちそれ

風を源氏まはるの御をとをうるる者ひはとを公ふ
源氏ろたるまをいるまるく

一五

中之文たるくしき美つさたふてふひるんやてさ君
さ法せうるこ源氏ゆまるの風の書ふくをひするん
咲みるる侍まとくまひ侍ていたくきたるひ
侍るかくまおんゆまるまを神ねなるのらるの庄ろ老
まるまる朝ろるをのるちいるうたるれてはく紅
うるたいのあのるをふたちておまくのるをとるる
をくみるしこまばるるあげてみるまる風あげて人こる

あらしんまもかつてわ
わらやうちるかきうわまこる
わらまくおろさもひてもしの
はるてをろろうふふこをおりろ雪
きわんまてこうこをらすさ
みはめんだろうつまてきて
こたもろうえぶいもとこ
いろえんく

中文和歌
牡丹のうらんにかるてわらさ女あり
きもちてんやうぶんうしこまれあけてゆる屋にわらまぶこ
こたもちてゆるうえまてしこの枝ありてまつあり

○行幸　豊臣之七　接遍もちとあり

寄とて参名とた源氏此ごろ十二月より世七の二月
までのまま
一十二月の冷泉帝大原野へ行幸の野行幸の儀に
池天皇より始る延長六年十二月の大原野行幸と接
して年月を西朱雀より始めて東へ移る廣
れかし橋門の月まで橋より源橋を
かけてゐる所の名を問ひ給ふ中将
為の宮さへえんと親たちとまうたち参てゐ
ものとて衣裳をあらためまうもんの和より出る
帝より和歌月出る度ごとに文四大臣やとりて源氏の
ものつるを四位ものつたる文法出ずまんとの行幸
ちく仕くり世
一源氏の拍子のよう奏せ給ひ東宮もち
物の製来よ人まうまあるまう源氏より源氏の和
なども書まて冷泉帝より義人を仕て紫一枝源氏へ
奉り給ふ
△宮仕きよ塩の山の里の古郷とてふまつぬ
古改方の山はの例おまこばまりうまとく
一月三日二月より文四位の宮の源氏

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
そこだく

○なたにくまの屋上人

あてもる人　　○おかうきき　　[illegible]

[illegible]

うちきしにねるすせし　　[illegible]　　[illegible]

うちきに雪ふりつもりたる　　[illegible]

月をきらを　　月に雪ふりつもるあまざるとらやうのを

よだけく　　[illegible]

武林の山つとめ　　[illegible]

[illegible]

[illegible]

よだけく　　○[illegible]

いのちのびめるなり　　[illegible]

[illegible]

[illegible]

源氏に内大臣とゐ[illegible]のやうなるあてびと

なるまて

○おなやけのみうしろ

うつろふなきんざし

○かさをわくひと

むつまれさるを

面影のたちそのまま

[illegible]

○[illegible]　　[illegible]

[illegible]

[illegible]

○[illegible]

おちぐつと　　ときそなりてうちとけてさてし
にるく　　をうてし　　○まろひ
人のとおそうて　　○さうの花
ものらうに　　○人間を作る
ものごし　　○さいつけやうと　　うちとけし
こめます　　○きれげよ　　ぬるう
おうるげよ　　奥をうおさしいつく
さうらにむつて　　をのめびむく事とし
いまぞの花美　　四大臣家を人のたにる
とうんをうあや　　○美にとしるくち

やうく　　○いうくく　　いうくきう
○高倉さとなめ山ときの山ときの山ときの

むかしの代ゆゑ[illegible]
大臣の[illegible]をとるべき[illegible]

一ゑ

十二月ゑ[illegible]世のろうにんさぶ[illegible]
[illegible]
[illegible]

かすまとりたのたうあひ大うるすまんのたう
うひんえうるにまつてこてりみとにくさらうぐあう
まあて皆まるたうまるたうまる　うたてはもものくまを
うりさかかざあうまりこちるやるひとあう
かつりるうれそとうる

蘭　豈五八

寄せん冬名をば詠にいらんの記とあり源氏廿七の九月
乃事あり　あるを氏ちとしたるとの　三月より七月まで文ケ月
乃事を載く　山ケ月のうたにおうつと四月のうたに紅
三月廿九日大文のうとを以文ケ雪宰相よりまいる事なり
一ゑうつ四月のうたまいりまいる　ゑはく出るとく
一ゑうつ夕雪し初雁ちうの紙とうたびたにや
はきとき
一ゑうつ源氏のうけまいる　ゑうの勅をと文ケ雪して
はきを　まいりてとうたびて　帝の記を

乃つまようさし入まつをおうつとうまいる文ケ雪をめくうの
よりうをうつをうつをあうつ文ケ雪いうつをもまいる
一柳月中旬に文四方の使をとおうつ月雪まいる
柳ごしにおうつに雪四しゑよりうり
一九月乃初雪小鞠月をおうし雪をつとまいる
文ケ月日さ上のうち乃方を和歌も文やまとり入四方の記
をうを月をきとを
初日さに出をとをもゑさ紙をの雪をけをとをあん
方を人乃中に雪ををつをうを人汁やをあり
一まて物より東一をを初年をう

○祝ひゆく年

○んぎょう　伶亮と申

○けざやかき

○まとるもの

○はあさぐり　鈴の白く

ふるゆきに

伝文法　夕雪詞　源氏のおうぐ　年玉のう

○らんめる　菜こ八月のおう

もものてぐる

ぬひぐるぬ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ

ぬひぐるぬ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ

あ〜ぐ〜ぬ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ

たいやぐ　○こたぐ　紅ぐ　ぬぎ

なりわぐさ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ

○まぐ〜しぐ　ぬぎ

ぬひぐまる　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ

いづぐ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ

うちぐ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ

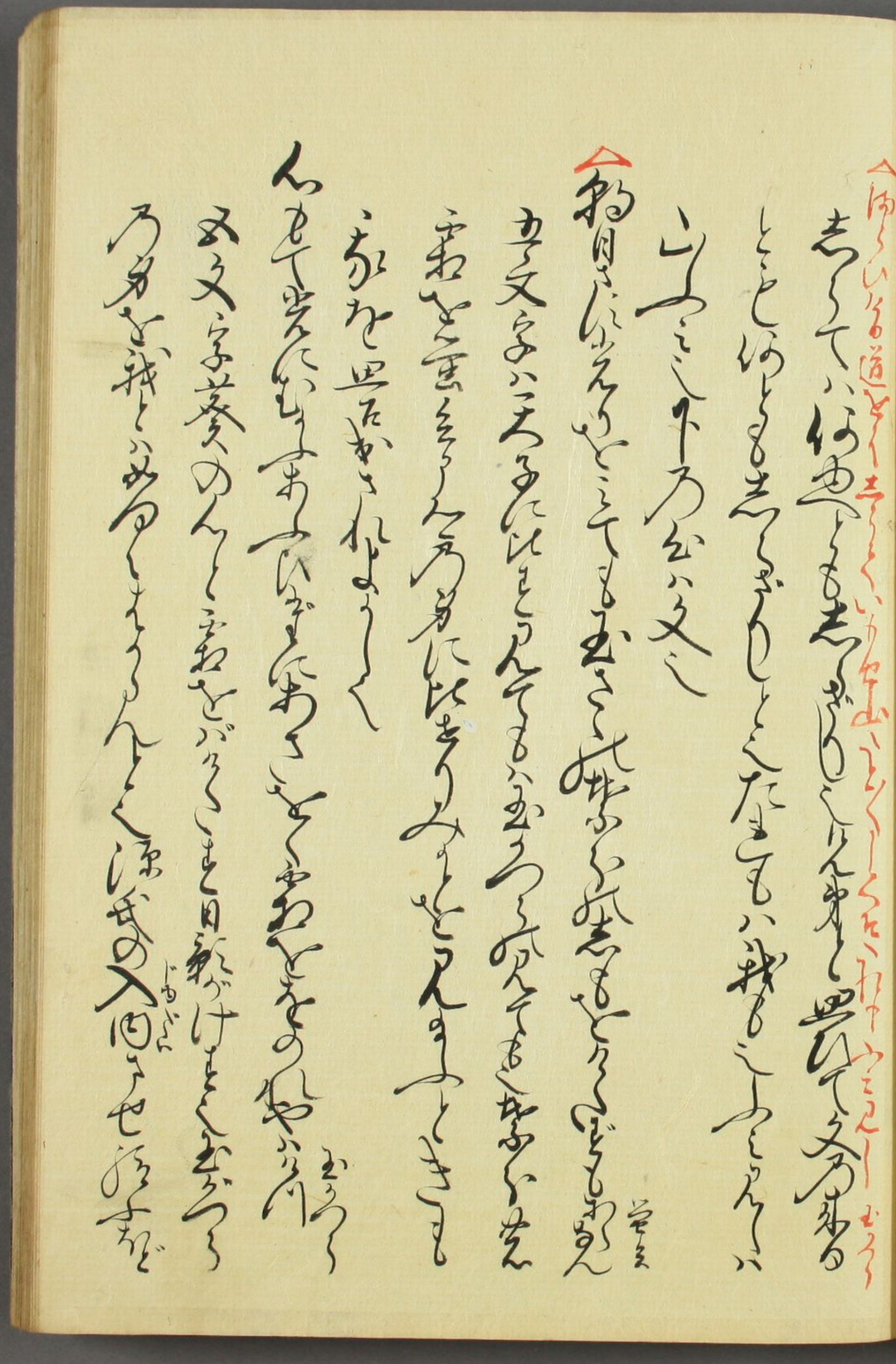
○てぐ　ぬぎ

あてやう　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ

いぐ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ

△おぐ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ

同じ世にいと多くしたうつくしき人の孫
なりとて侍る
やうなる人やうの人は源の
おなじ
わかるといふけれども源氏のもとにもいと
まれなりかくいてかくしふるもいと
珍しけれどもこの人家のふるまひ
又文字よくかきたるにいとあさけなりとい
なりしもさるものくらべとはいとこと
かごとがましきかたちぐさはあるとく
いもを山ぶきとたづねてだに結ばまほしけれ
日本紀の姫君と半らうの歌
柏木の



とてはいかなるものにかあらんとおぼ
しとどめるもいとつれづれなるに
山ぶきの下ろかに文
の
和日さしいでたるもいとめでたしとて
立文をいとうるはしくもとりなしたる
雨もいとうるはしくもなりぬ
雨をいとうるはしくもとりなしたる
あるを思ひおきてはよろこ
んもてはやしまゐらせたるもの
又文字美のんてこそ
乃名を我とぬ
ぬとて源氏の入道

よるべのかぜまちがほなるあさ

一首

夕雪はしたてうもとのうめの花をみるにつけても

うめの花ちりのこりたるつまのうち入

まをうつ田にてとり給ふ人たち

へうきん

板橋（いたばし）　巻之九

寛文六丙午年十月廿六日より廿八の十一月まで
一ぢうの間のうちに入四ゆきうに雑乃
木もし四大ぢ迄源氏よりしるしあるさ
ゆとぢうも源氏も大勢とびくゝ行ぶりしく合
まとゝもせひるまして源氏まゐ行ぶ三日の程を云
家ぢうまて源氏ゝ行ぶ
一霜月よハ被（わさ）ゆまて実へ四位乃男女ともれ
まるも大勢ゝまゐまつし
一大勢のまゐ見ぶる源氏ゝ行ぶ（けぶり）まて

ゝゝとれゝゝしゝゝゝよりかゝりまゝ
一ぢうの実勢乃小方ゝゝゝゝ男女ゝゝ多けま
ゝ年比勢のゝゝゝゝ小方ゝゝゝゝゝゝ家ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

出ようとせれいおいてもおなじ
一類にたいしてかのうちの方に対
よりて小方の文武ともに
乃々むらひなり拾本二三
後のち男二人あり次男
つまりまつ長女文とまつ
人りハとて宿られ別
ことよりこれの髪結
市太郎にまつの方より
未だ対面もせんと名
かくるまでことをとりたて
一玉うつに類にたいまこひて小方乃文のまと
まるとひよりの行きにて武
なり十とハとなる男子二人
て来て宿にをき又来
一源氏廿八の三月男
四位のこと入内
とこたまつの四位乃
行て文むまやく月乃
幸うらせまひて一

かまへて讃岐の宮へまゐらせたまふといふ

一夜いらつる月源氏すまうむつかしく文をやりまきたるを

をとこのびてやるをみるに五月雨源

氏和歌をよみ給ふ

一三月ゝ六条院おはしまつるのおまへ西対の桜の花盛の

ゝ山ゝの咲ゝるをとゝひて暮るをつゝ讃岐のもとに

おはしまるむつかしの白絹へ源氏つゝ給へ給ふ

かゝく讃岐也今しはし

一ゝ徽殿女御乃ゝ秋ゝ人の恨ゝある事

まゝ物のまゝゝおもひ出給へ文書

好多の事ゝ

一三月ゝ

石ゝ乃佛ゝも雜の物ゝ

讃岐ゝ大物のむゝ

ゝ物ゝて雜ゝ嫌ゝ

ゝ

○やまゝ

人ゝ侍き人のゝ

物ゝ

ゝ

○うゝぐ

なるごとくせでさるとにでさるときけ
んあきて　　なるごとくすり　○あるあるなる
このまうう　　○買ひもとがもと
んもてあるあるなる　んてるてるてるてるてる
すよの
○買ひかるあるとき雨ふる
雨あやたにふりて　○わるるる川　三寄りく
三つを川　　金
陰のみおりあるとえ　夜たるあるそ上なるとあり
百姓に水をもとる
○さるまやうに
あるるなるなるなるる
○さるのひるるる

家ちらひ
人のなるうごさあるごさ
うるるるるる
○ひとあるもあき
○さるあるあれ　結ぶるる
○るるるあるるるる
出るもあるあるる
人ごとやさ　和多
○うるるるるる
○んのるるる
もるるるる
人ごとやさ　和多
○きたたに紙をあるるるる
手ろもんとやさ
買ひたがめ
○年るるるる　竹刈るる
もやる
○おろるるる
さるつけて
○おいるるる　大るるる

むらびかりして　人乃ちゝ　文ちうもちゝ
おろしあめ　おろしあめ
神乃こゝろ　川のこゝろく　河海川
岩ひつく神乃ゆゑ乃秋ふかゝ神の水乃ながれ
雪もとこしはまり　雪やもり　○秋一よ
雪もよ　よふ物乃く
たき　我ゝ乃ゆゑ物ゝ我ゝを雪千や
ゆきしやた　実乃ゆゑ　○人と紅乃ゆき　人うゝ雪
一秋ゝ乃角ゝて　○おもゝ　面乃く
年ゝ乃ひかゝ乃ゆゑ乃ゆゑ乃ゆゑ

大乃小乃ゆゑ人乃ゆゑ　ゆゑ乃ゆゑ乃ゆゑ
八文字乃ゆゑ乃ゆゑ乃ゆゑ　文乃小乃ゆゑ乃ゆゑ
さゝく　○てら年乃
家乃ゆゑ
○石まの
こゝ乃ゆゑ　岩乃ゆゑ乃水乃ゆゑ　岩乃ゆゑ
角ゝく　曲乃字　○さゝかもの　恋　日本紀
月乃ゆゑ
秋乃ゆゑ　ゆゑ乃ゆゑ乃ゆゑ乃ゆゑ
内乃ゆゑ　二月身乃ゆゑ　○ゆゑ
雪乃人乃ゆゑ　○ゆゑ　ゆゑ
ゆゑ乃ゆゑ

まめうた

木をてをうえうゑる

をつけ　さこはけし

凡もつてよ　俳く

○ふうさにのとめえぬ

西山けらふゑる

○さよなきちゆう

○ちろ紀まり　を思ふ

玉ふうをまる神に寄せ物をしぶく

ゆてるく　ふるゑぶく

○たゆあらを　ゆうく

ふうらく

和めるく

○ふ化てのびけ沒ゆる

まをに

玉水のこだるやうに

○折の玉水数ふぬ

なるる面くをゑせををゆる玉水の

浪に沒を

もをに月

よけるを平のつまるやうを　伊氏

月ふうふるし折ひしまを

あつまのをくぶををぶきて玉藻みをうをうをふをを

すぶきを和琴に寄るるく　○をてをゆるを思ふ

さくをこにる　○まを花まく　こをのる

菊屋の留守ぶくを化年北まをををうをうる月ひ

咲とを歌をのるく立を

又玉ふうをを山ゆるをたを

芋根ををまをにをを鶯のをを歌をまをををををを

〇今はとて宿を離るる桜ゆゑ散るを別れと思はざらまし　姫君

をしみ奉るとて

なしきとは思ひ出でもなげにとて

いま一枝は思ひ出でもなくとて

大将乃君

〇かぶとをうちもたれ給へる御姿

おもてをかくしたまへるを

と初めてうちまもりたまへる紀伊守

三位の殿

いかならんかをもてあつかひ給へる

〇春の日はいとのどかにうらうらとして霞の

ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]

面もしろくはなをあ〳〵ふひあてこゝろゆく
山ぢを分にうてゆみるとに思ひやまた思ひゆれ

一ゑ

さうじみいこゝろうたけまうこゝろまて
とゝろほとに紙よりはさまぐうて大なるこのたてもつる矢
こゝろをえよもて友のうゝろまやこゝいうけまなど人の
やうにあるかぐもうあさまきたあるまてねまみ
ひけさにちいさ紙矢とゝをせひけまの神よう
入てきあるまひまうつのうの方出んとせるゝ小方をこ
のようなるまとゝを出やうゝうまるひまて

○梅枝　巻十八

初めて巻名と成る源氏廿九乃至二月中十

一月石姫君十三歳に成給ふ源氏の君の御

小女也母二位つゝ合をさゝ給ふ三月十日過ぬ

さるべき御ものゝ具ども出給ふ

乃紅梅さくりたる枝に

黒方と梅花と二壺入て文添て源氏の君

御方に参給ふ

御使に引出物

よせうぎ合給ふ

一種つゝ

かづけ給ふ

一月雲居雁の君の御方に

乃まゐ給ふ

さくら

さくら

比巳源氏の君の御琴

夕霧の君の御方

一十一日成

て雲居雁の君の御琴

初て対面

一

一月石姫君

入内

人々

東院の御人

人

いざと方々この姫君をもとめ出せども出でず源氏
殿にて出でぬ所のもとめもとめ
月日をへてもとめの相意をもつくしかねて
双紙どもをくしたてて世々書記中物語
絵とうせ源氏とうさまの
二三人まちまいらせ給
とさまざまに
此冊宮ゑ
まち源氏のたびのよう
ゑとんまの水の所浦
姫君をもとめかねて源氏
姫君をもとめ出せ
一源氏
おかたのあづみ
切紙
源氏の第六
一源氏の
ひらをもとめ
一まつ

四にも外ふと○ふてくさ　二枝と手ぶく
あへもの　あやうあく○菊に紅たるあはせ
おりまひたる笠ぬ〳〵手ぶく　手ぶく
心ありて凡のよくめる紅の
いふ〳〵ふてくさきの
紅ざくらて　名みどりの
名みとりハ白月天和　四位ぶ　異ぶく
かげさぐさ　○笠もとくる　おりかけ
みとまげ　ぶく　ぶく
そぞたる年年　正徳　ぶく○いまり　ぶく

手ぶくを見ぶく人の涙さくへ　ながめ　ふちと
水芝ハ笠ぶとり
たまぶ　ぶく　ぶく　ぶく
涙をうけて
○すこあるる
○けしう
△紅の書ハちりはぶに
文を付ける紅ぶ
ハ綿ぶの白ぶ
てと人ぶふ紅ぶ
近く人の神ぶ
さるぶ神ハ
○ぶ　ぶ　ぶ　

[illegible]人のこうん[illegible]なつてゆく[illegible]
又文ふみ[illegible]の梅く人のとがめやうにぞひきん
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

なりにけるをとりあつめて一枝をるわざとて
うお丞流うとてちらすべきうめの枝をぞ
てまいりてい（源氏河）るまくしまいりたまへてつけ（たれかこのこころをしりてしまあやて）
いろぎわまるあるかりそいりつとひさしとおひつぎんの
きたにあるつぎこをとて大にまろうつ入うてうぐいすまん
るうよふ文ちうの枝をろさよふ梅をえうてもてまくし
むとひるるのさ清もたまよひうに程丞流のそに花のふ
ぐりり寧相中ねりうひきまひこめさせまひていうう
忠ようしまうでいづさのろうあるのうたなかうこうまに
（袁左衛文さうのうちと）女のさうぞくうばけまう（源氏の君もうの紙ものの）

花（むめ）と杯をとりつけさせまう

源氏（ホルキ）うりまくに花をぞおりて　庭に梅さうく
丞流よりぢんのさこたるうつぎこうくうぐいすのうに
梅ふし源氏をもてなすとて　宴のうる
りくいつひる酒のまもりこ和に女のさうぞく
づけおく

○ 夜裏の夢　巻之十九

詞とゝ奏名とゝ源氏ゆ九乃三月より十月とゝのゝ
一　三月ゝ内大臣や参上の母ゝ（ヤまい　塗板ニ有）　（大ゝ臣ゝ）　（のゝ）　（ゝ）　ゝ月にて源氏の
極ゝ所ゝ四大臣内大臣ゝ中ゝ御ゝ中ゝ重臣
ゝ奏の神ゝ引て宴井ゝ月の
宴ゝ大ゝの四大臣ゝ
のゝゝ乃ゝ
ゝゝ
ゝ
一　卯月ゝ内大臣ゝ
仮ゝ極ゝ所ゝ

ゐまをしてこれあり源氏へいと
まこゝろたかきまことをもて今年四月八日
おてもの御のぶらんとてあるに大臣源氏あ
そびのくさてゐ内大臣宴井乃の半をもとめ申す
給て宴をさし出あり決くのこゝろ八分よみくせ宴
解ぶるまゝ松末中納言に今年乃乃びけとの紅葉井乃
乃方をもて今年こまりの方こゝろ知のみあり
一日月八日宴ゐて瀧佛あり導師とゝ者ゐ日
宴の方くゝわゝ八出あり大臣のこゝ
せ給ふ大臣おゝ皆内ゝ

一月廿余日ゐ名姫君入内の行幸ゐ院上御覧源
氏ゐとゝ玉依姫の別宮神とゝ行ふ法月内の
月乃条をつゐでに六ゐ曉おゝ年廿四年源氏
も出ゐ宴に上達部おゝ
むゝ上宴文を和と奏上とゐ本あゝひ中奏上ハ
くゝまゝ今年中納言ゐ人ゝ殿ハ中文おゝ
内宴ゐ院上ゐ人ゐ和乃樣ゐ源氏ゐ奏の
勅使ハ内大臣乃ゐの御中ゐ源中納言女の使ハ惟光の
姫の宴内侍女ゐ院ハ女宴の三人ゐ中ゐ
今年ゐ方ゐ今年ゐ宴内侍女ゐ

一殿さま内に成とゝのひて内侍殿を
右上をゝ召して源氏への御
消息をとゝのへさせ給ひて
右上とゝのへ給ひて
らも殿者のためのものだに
成とゝのへて御
右上を内侍殿
一八月定考今に源氏殿
一四大臣八を改大臣ゝ
光ちる里に振舞て八
乃内をとゝのへ
水乃ゝ
一三条殿のゝ
乃ゝ
ほゝ
ゝと
一十月廿ゝ
行者ゝ
ゝて
場乃ゝ
数ゝの

今一ぢの池りゝ面へうけ杉間のもて杉と杉ゝ長
をこえ延ハ寺の西りまりの尊にて
一枝好中文の度のあるもとまとまり拾ひ
陽乃上をかりしゝ
一小型にて比叡山麓の為る持一ゝ為ふ此池にて
杉乃くのゝ為ふ実とを大大の四方浦乃もとにて奏する
印作とまりて四階にまる
一芳て樂の人々友上のわゝハ義ゝまり毎
相壹寺朱雀流へ行幸あり年ゝ
を出ゝ内大臣のあり義ゝ上ゝ家寺ゝ

行幸内大臣おゝて舞踏ゝ
ゝ源氏君を拝てゝ
ゝ乃ふの度を家乃わゝハもみ
じき義まひ乃ゝ乃ゝ入日乃義を花
一ゝ乃ゝ乃ゝ極をしまる宮ゝ乃度ゝ人ゝ
一ゝ乃ゝ乃ゝ河ゝ河ゝ乃ゝ人ゝ
ゝ日ゝ
実ゝ乃ゝ乃ゝ

○かゝち紅ひ
内大臣乃ゝ乃ゝ義ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ

○よゝひ
源氏ゝ乃ゝ世ゝ乃ゝ
友乃ゝ乃ゝ義ゝ乃ゝ

○ 姓流（どんふる）　少（ごさい）　伊勢国

○ 名（ミヨウキ）　注　　こうげく

○ おくもち

○ 年　　

こうげく　　○ えもんや　異説

まいまぐま　　○ なたにものの　万乃まく

おくるまでの　奉と云公　○ 紀のまるで

注るる者よりひとのざくつ

ある人　　○ いつ（斎）ぐ　　

あやわるどかたより　　おも云名ひらとつ

○ むらぐたかんぞ紀ぐ　　四左

紀ぐ　　四左

紀ぐ　　四左

[illegible]と久寿乃清水といひてもてはやすなり
[illegible]おもくく又云国府の名と久寿乃清ひか
すいかなるゆへにかとわろきあたひに
なりたるゆへとく又のまいとのまいとをとりまむ
[illegible]ぐちの清さたのきとうめぐちの清さためこふおせさ久寿
興云菊酒云古人はせ守ましに成にあらしかき
由こもいつくさぐまもるくすりもあるも
乃なまいきはなれぬ名を清くいひなしたる
心もおくく清さたのこもこそ和とこ又義
菊酒のとくつ国古臣守[illegible]ましてとこ[illegible]

久寿をよびなをしてとくあらくすくよ
[illegible]雑おもはるいまれぬるとく　菊云
菊酒乃つよ紀貫也人のをもれ川ゐたのこ清と
り名をばれかをざるくさとく
今[illegible]ゆ名なるあるしに人の行末を見寿水久寿
[illegible]とふをを指くかんぢくあるしとふあそあるとく
みし人ゆ大文く　志清水
大紀人のげたにみをまるいあまるいさ[illegible]水
かげたにみをゆ大文の名おもあるとくつもるくい
[illegible]のみをとこんあまをとこんるふくさむるあも世をえ

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一忠

[illegible]
[illegible]
[illegible]